

80年アフリカ・インド日食の旅行事情(2)

木村精二

前回はインドについて少し申し上げました。

今回は、カネとヒマをかけてでも(インドよりは)アフリカを選びたい、という人のために、ケニヤについて述べます。といってもすでに塩田氏が、この“情報”の前号に詳しく書いておられますので、以下の情報はこれを多少補足するという程度にいたしました。

ケニヤへの足と運賃

舞台の中心は、1973年のアフリカ日食のときと同様に、ケニヤです。従って日本からの足は、その首都ナイロビに到着となります。

往復の航空料金は、10人の団体で37万円、25人ならば27万円、個人の場合は53万円。インドまでと比較して、たしかに遠くて高いといえましょう。ただしこれは“正規料金”ですから、“適切な”航空機を選べば、ずっと割安にいけるはず。

直行便はイギリス航空だけで、木曜の朝に東京を出てから途中ホンコン・コロンボ・セイシェル諸島を経て、金曜の未明にナイロビ着。日本航空を使えば、月曜又は金曜の昼前に東京発途中ケニヤ航空に乗り換えて、火曜又は土曜の朝にナイロビ着。インド航空で月曜の昼過ぎに東京発、ポンペイでエチオピア航空に乗り換え、アシスアベベ経由(乗り換え)で火曜の昼過ぎにナイロビ着。そのほかアリタリア、スカンジナビア航空を使う方法、また木曜発の北京経由で金曜昼前着という手もあります。

大阪発の場合は、火曜の昼過ぎにインド航空で出発、ポンペイで同国機に乗り換えて、木曜の朝にナイロビ着が便利でしょう。

さて、ナイロビでしばらく休息、あるいは観光を兼ね1~2泊してから、皆既食帯に入るには、やはりケニヤ国内航空で飛ぶことが得策でしょう。第一の観測候補地は東海岸で(以下「日食情報」1979.16.1. P3の地図を参照してください)、中心線に近いマリンデまでは毎日1便、昼前にナイロビ発、所要時間1時間半、機種はフレンドシップが主です。北限界線に近いラムまではマリンデ又はモンバサ(後述)経由で毎日1便、そのうち月~金はナイロビ発早朝、モンバサ経由でラム着は昼前となります。皆既帯から外れて南に位置するモンバサまでは、ナイロビから毎日6~7便飛んでいます。

東海岸はさんご礁の海のサファリ

ケニヤの海岸線は数百キロ、椰子が茂り、真白な砂と澄み切った水、太陽が隠れるのは年にたった数日とか。外縁礁脈に縁どられているので、遠浅の温水と、ラグーンを自然に保護する形になり、繁殖する生きたさんごの島は正に壯觀で、アフリカ最初の海洋公園として指定されています。熱帶魚の宝庫、また海釣りの名所にも事欠きません。

マリンデはナイロビから東南500キロ、ヨーロッパ風のリゾート地、ケニヤ第一の釣り場として脚光を浴びているそうです。日食の2月は釣りのベストシーズンでもあり、カヌー乗りなどなどマリンスポーツも盛んに行なわれます。

ラムはマリンデの北東約200キロ、沿海貿易船の故郷で、アラブ文化とスワヒリ文化がミックスした魅惑的な中世の街を今なお残しているそうです。暗い僧院と回教寺院、道路の巾はラクダを連れた旅人がやっと通れる程度、人々の生活・服装も昔そのままといわれます。宝石伝統工芸品などを展示した博物館、東アフリカ最古の町のマンダ島なども訪ねたいものです。

モンバサはナイロビに次ぐケニヤの大都市、新旧市街と2つの港からなっています。古いアラブ街は狭い通りが曲りくねり、港には豪華帆船の発着が見られ、ボルトガル人が造った要塞が今は博物館に形をえています。

新市街にはエリザベス女王の訪問を記念して作った象のきばやケニヤの独立を記念したウフル噴水、ヒンズー寺院が影りを添えます。

古さと同じに工業都市・リゾート地など多面を持つのがこのモンバサのようです。

雄大な自然に満ちたケニヤ

日食観測のためせっかくこの東アフリカの国を訪ねたからには、時間の許す限り、観測地近辺だけでなく、あちこち回りたいという方のために一ロメモを。詳しくはしかるべき資料をご参照ください。

ナイロビ 首都・太陽の町・花咲く樹木の町、ケニヤッタ会議センター

ナイロビ国立公園 サファリの予備知識用

ナイバシヤ湖 かいつぶり・あおさぎ・へらさぎなど300種の水鳥

ナクル湖国立公園 フラミンゴの大群20～100万羽・ペリカン

マサイ・マラ動物保護区 ライオン・ヒョウ・サイ・象

アバディア国立公園 ツリートップホテル、ここでエリザベス王女が女王となる。

ツルカナ湖 旧ルドルフ湖・人里離れた禁断の湖・ツルカナダンス

知つておいて損しないあれこれ

入国にはビザが必要。日本ではイギリス大使館が扱う。1.800円、有効3月間。

種痘・コレラの予防接種が避けられません。黄熱病も受けておいた方が安全。

外貨の持ち込みに制限はなし。ただし現地の通貨が余っても、1.000シリング以上の再交換は不可。

通貨の単位はケニヤシリングで約25円に相当し、1シリング=100セント。

服装はサファリルックのような綿・麻地のものがよく、冷えるのでセーターが必要。逆に長袖の上着・帽子が強い日射しを避けるのに必要です。

ケニヤの面積は58万km²（日本の1.6倍）、人口は1,300万人、民族はアフリカ人98%、公用語はスワヒリ語（1974年までは国語がスワヒリ語、公用語が英語）、宗教はキリスト教25%、イスラム教6%、ヒンズー教1%、そのほかは各部族間で原始宗教。

国名はケニヤ山から。ケニヤの語源はカンパ語の“縞のある山”または、キフュ語の“神秘の山”といわれています。

〔参考資料〕

「トラベルジャーナル」1978.5.29号：

「スペシャル・ケニヤ・サブルメント」

「トラベルタイムス編集：

「ケニヤ全ガイド」